様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００６５５

研究課題名（和文）ロシアとコーカサス諸地域の文化接触：受容と変容と離反のダイナミズム

研究課題名（英文）Cultural contacts between Russia and the Caucasus : Dynamism of Mutual Transformation

研究代表者
楯岡　求美（TATEOKA, KUMI）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：６０３２４８９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：コーカサス諸共和国出身の創作者たちが、ソ連の規範文化（公式文化）の形成に寄与した際、ロシアと出身地域においてどのような創作活動を行わったのかについて研究を行った。ソ連において文学・舞台芸術・映画では統制をかいくぐって実験的表現の可能性が行われたが、諸民族共和国では言語の複数性を利用して検閲をかいくぐる態度も見られた。他方、民族作家の作品翻訳に際してエキゾチックな要素が追加される問題とともに、別の既存の作品をもとにした翻案の創作依頼が行われていた可能性がある。伝統文化がかえって前衛志向の芸術家たちの実験的表現の中に組み込まれたり文化記念碑の部分的装飾として継承されたこともソ連文化の多様性である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
複数言語性に注目することで、民族共和国において検閲に対して緩やかな抵抗が行われていたことを明らかに出来た。また、中央政府（モスクワ）と個別の民族文化、という1対1対応だけではなく、多様な文化が併存する中で、前衛芸術家たちが民族文化を部分的に摂取し、コラージュすることもまた伝統の保全や変容のプロセスに寄与していたことが分かった。ソ連の歴史を負の遺産として忘却したり改変したりしようとする動きに対して、文化的多様性の研究は多角的な検証の必要性を訴えるのに有効であり、国際研究協力体制を構築する過程でも、フェイクヒストリーなど文化記述というアクチュアルな問題を考える受けで重要であることが確認できた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the activities of creators who has roots in the Caucasian republics from the view of their way of creation both in Russia and in their regions of origin.Our concern is that how they contributed to the process of the formation of the official culture of the USSR.In literature, performing arts and cinema of the USSR, in particular, in the various ethnic republics, they used multilingualism to circumvent censorship bans. On the other hand, it is possible that not only the problem of adding exotic elements when translating the works of ethnic authors, but also the problem that public authorities make commissions to writers of minority origin to create adaptations based on existing works of other ethnic authors.
The diversity of Soviet culture is also reflected in the fact that traditional culture was incorporated into the experimental expression of avant-garde-oriented artists or was cited in Soviet monuments as partial decoration.

研究分野：ソ連文化研究

キーワード：コーカサス　ソ連文化　複数言語性　アルメニア　ジョージア　映画　トフストノーゴフ　アヴァンギャルド

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来、ソ連の多民族性・多文化性については、ソヴィエト権力による画一的ロシア語化と諸民族言語・文化の保存という対立構図で論じられてきた。しかしペレストロイカで民族主義が台頭した際、「文化的に優位」なはずのロシア人の間で「他の民族の伝統は温存されたが、ロシア文化はソ連化によって民族的要素を捨象され、伝統が失われた」という不満が噴出した。伝統は時代とともに変節し、「純粋な」ロシア文化は規定できない、という問題とは別に、革命後の新国家体制形成に際し、ロシア語文化も他の民族文化同様、大きな変化を強いられたことを示している。公権力側が政治的諸用語に多用した略記号に象徴されるネオロギズム(新造語)や「ニュースピーク（新語法）」（Б.Сарнов, Нашсоветский новояз, 2002）、プロパガンダとしても活用された映画の名セリフ（крылатые слова 語録集)の慣用句化なども、ロシア語の日常表現を大きく変えた。

対して民族文化の多様性を保持する政策の下、諸民族語での著作が認められ、現地語に精通する専門家が直訳し、文学者がロシア文学の形式に合うように整えるという方法でロシア語への翻訳がシステム化された（中村唯史「ソ連における翻訳の問題に寄せて：ガムザトフの詩『鶴』再考まで」2010）。ヨーロッパ・ロシアで高等教育を受け、ロシア語文化の担い手となった民族出身者たちも従来とは異なる視点を提供する重要な役割を果たしたはずだが、個人別研究にとどまりがちで、出自ごとの文化コミュニティーに注目することで、ソ連文化の多層性を考える必要がある。

他方で独立した諸民族共和国ではロシア語が担ってきたコミュニケーションや情報流通の手段としての機能は、ロシア語翻訳本の流通やインターネットなど、現在でも一定の役割を果たしていて、将来的にも必要とされる部分がありうるが、新国家の民族アイデンティティを強調するためにソ連時代を占領期として捉えるなど否定的な評価を行うだけではなく、忘却・消去を即す政策が見られる。コーカサスにゆかりのある吟遊詩人オクジャワや演出家トフストノーゴフ、モスフィルムで活動したジョージア出身の監督たちなどの活動を若い世代が知らないことも多い。過去を一括して否定・忘却するのではなく、功罪を客観的に検証をする時期にある。

２．研究の目的

ジョージア(旧グルジア)とアルメニアを含むコーカサス諸地域は、多民族国家ソ連のなかでも独自の文字文化を保持しつつロシア文化を受容し、ソ連の規範文化形成に言語学、文学、演劇、映画等の分野で大きな役割を果たした人材を多く輩出した。ソ連文化は画一的に中央から周縁へと押し付けられたかのように考えられてきたが、異なる文化背景を持つ表現者の作品が広く流布されることで、ソ連の文化規範も個別作品を検討すれば、内容や形式において多様であり、時代によっても変化したことがわかる。このようなソ連文化変容のダイナミズムを明らかにするため、ロシアで活躍したコーカサス出身者が公式文化にどのような変化を起したのか、周縁地域においてソ連の規範文化が受容される際、現地の文化状況の影響を受けて、逆にどのように変容したのかという双方向的影響関係のダイナミズムを明らかにする。さらに、ソ連崩壊後の国際化において諸地域が旧来の規範文化にどのようなラジカルな変更を加えようとしているのかについても調査研究を行う。

ロシア語をドミナントとするソ連文化に与えたコーカサス文化のインパクトの双方向性を文学・映画・演劇などの芸術ジャンルにおいて明らかにする。この問いは以下の 3 点の問いによって構成される。

- ソ連の規範文化（公式文化）形成へのインパクト
  コーカサス諸共和国系の出自をもち、ロシア共和国で活躍した創作者たちが、ソ連の公式文化形成にどのような役割を果たしたか。
- 諸民族地域における規範文化受容に際するインパクト
  規範として位置付けられたロシア文化がコーカサス諸共和国においてどのように受容され、現地の文化の影響下で変容したのか。
- ソ連解体後の諸相
  ロシア文化が主要な文化モデルではなくなった現在、コーカサス諸国においてソ連文化がどのように継承または批判され、逆にロシアでは多民族国家としての複数文化性がどのように捉えられているのか。

以上の三つの問いを手掛かりに、中央から末端へと画一的に供給されたと考えられてきたソ連の公式文化が、決して固定的なものではなく、歴史的、地理的、民族的多様性の中で揺らぎ、変容したことを明らかにする。

３．研究方法

「文学・翻訳」、「視覚芸術（舞台芸術・映像）」「理論・歴史・文化」の 3 つのグループに分かれて研究を行った。意識的に思考実験的討論をベースとした共同作業を重視し、複数の研究者による多面的考察と理論的検証および研究成果を共有化するため異なる地域・分野の研究者との討論による分野横断的な交流を行った。具体的には 2018 年度、2019 年度と連続して、エレヴァ

ン、トビリシにおいて国際シンポジウムを企画し、本研究の問題意識について、どのような視点や意見を有しているのか、意見交換を行った。
　次にモスクワ・ペテルブルグといったロシアを介した書籍購入ルートでは入手困難な旧民族共和国刊行物を中心に現地で資料収集を行おうとしたが、新型コロナ感染拡大の影響により現地渡航が難しくなり、また、現地の研究者の協力を得るのも、当該地の文化施設が閉館したり、り患者が出たりしたために極めて困難な状況になった。現地渡航の再開に向けて、準備を重ねたが、ウクライナへのロシア軍の侵攻の影響で調査地への渡航が引き続き困難となり、日本国内およびネット情報を中心に資料の収集と整理を行った。
　最終年度には海外協力の成果もかねて、コルネリヤ・イチン（ベオグラード大学教授・ロシア・ソ連文学）を招へいし、連続研究集会を行うことで、相互の研究成果を共有した。2023 年秋に関連テーマでガヤネ・シャゴヤン（アルメニア科学アカデミー文化人類学研究所・文化人類学）、リュドミラ・ジューコワ（ロシア国立人文大学准教授・宗教学）、アレクサンドル・カルトージヤ（トビリシ大学教授・コーカサス研究）、ケテヴァン・フチシヴィリ(トビリシ大学教授・文化人類学) らを招へいし、本研究プロジェクトの総括を兼ねた研究集会を企画して振り返りを行う予定でいる。
　若手研究者への支援についても、部分的ではあったが国外への渡航を支援し、また意見交換の機会を設けて研究ネットワークの強化を図った。

４．研究成果
　現地の民族語とロシア語のバイリンガルスピーカーである研究協力者と資料調査等を行う予定であったが、2018 年にエレヴァン・トビリシで研究パートナーとの打ち合わせ、2019 年にトビリシの研究パートナーと資料の事前調査を行ったところでパンデミックにより渡航困難となり、資料の入手が困難となってしまった。そのため、限られた範囲での研究遂行となったが、部分的であれ、国際的な研究交流の中で以下のような状況が明らかになった。

　ソ連はロシア帝政期から受け継がれた文学中心主義的様相が色濃い。民族語で書かれた作品をロシア語化する際に、いわばステレオタイプな民族イメージを連想させる用語、エピソードが原作者の意向に関わりなく追加される傾向にあったという問題だけではなく、有名な民族創作家にテーマが「発注」されることもあった可能性がある。たとえば、ダゲスタンの有名な詩人のガムサフルディアの詩「鶴」は、ジョージアの内戦期に若くして亡くなった無名の詩人の作品が下敷きになった可能性があるという。元詩がどのように流通したのか今後、アーカイヴ調査等と通して検証する必要がある。
　逆に、ゲオルギ・シェンゲラーヤ監督の映画『若き作曲家の旅』（1985）の原作の小説は、作中で扱われる時期をあえて政治的解釈の分かれる時期からずらして解釈するなど検閲への対応に苦慮したが、後半部分の大半が公開を阻まれた。しかし、検閲によって許可された部分をロシア語雑誌に掲載し、ジョージア語雑誌に「翻訳を転載」する際、章の数を変えることなく、すでに公開している部分をダイジェスト化し、未公開部分をジョージア語で掲載するなどの方法で検閲をすり抜け、抑圧に対抗したという。
　映画においても、民族語で制作された映画フィルムは通常モスクワにネガごと送られて保管され、改めて編集とロシア語吹替えがつけられることになっていたようだが、トビリシ映画スタジオ（グルジア共和国）は同一の俳優を使ってロシア語版も制作した作品がある。NAVL コレクションの一部として日本で保管されていたソ連映画コレクションの中にあったミヘイル・チアウレリ監督『最後の仮面舞踏会』(1934)はモスクワのゴスフィルモフォンドから提供されたものだが、すべて俳優の口の動きとロシア語のトーキー部分が一致している。ジョージア映画祭 2022（岩波ホール）で上演された『「ケトとコテ」を求めて』(2009)では、ジョージアの国民的ミュージカル映画の修復にあたってモスクワで保管されていた音声と俳優の口の動きが合わず、民族言語でも別途撮影されていた可能性が高いというエピソードがある。トビリシ映画スタジオは火災のためにかなりのフィルム素材が焼失したこともあり、資料調査は簡単ではない。他方、ソ連継承国のロシアは修復・保管技術の高さを根拠にアーカイヴの他の独立国との共有について消極的であるようだ。ハプスブルグ帝国のアーカイヴについてオーストリアとハンガリーが共同利用できる環境を整えていること飯尾唯紀「文書は誰のものか　複合国家の文書館とハンガリーの歴史家たち」『民族自決という幻想』）を参考にソ連のアーカイヴの共同管理の可能性について考える必要がある。それは、アーカイヴの置ける言語障壁の問題も孕んでいる。現在、各国語とに公用語として一つの民族語が選定されることによって、複数言語によるアーカイヴを調査・管理する人材が払底してしまう。トビリシは長い間、ジョージア、アルメニア、アゼルバイジャンを主軸とする多民族国家であった。とくに革命前後で大きく領域が変わり、居住者の移動が多かったアルメニアについては、主としてトビリシがコミュニティーの文化的中心地だったこともあり、いまだ多くのアーカイヴがトビリシに保管されていると思われるが、例えば日本の国会図書館にあたるトビリシ中央図書館のアルメニア語資料について理解する人材が圧倒的に不足していて、整理できない状態だという指摘もある。今後のソ連文化研究においても、資料の多言語性にどのように取り組むかは大きな課題となるだろう。
　ソ連崩壊直後には各地で共通して政治的統制が外れ、ポストモダンを含め多用な文化潮流が

見られたが、急速な市場経済化と国際市場でプレゼンスを示す必要性は文化状況にも影響している。では、国内の政治・経済的安定およびエキゾチックな伝統文化がグローバルな市場における有用性のアピール（国際的投資の対象となりうるか）となる。文化的唯一性(オリジナリティ）は世界市場で魅力的な商品になると同時に、国内に向けては国民の文化的アイデンティティを支え、愛国的な求心力を生み出す装置として期待されるからである。そのため、博物館、美術館を活用し、歴史および伝統文化の特異性を強調したイメージを構築することが求められている。先の科研研究では、資源に乏しいアルメニアが、紀元前 5000 年にわたる壮大な歴史イメージや迫害されるキリスト者のイメージとともに教会群の芸術的価値の高さを一括して強調する文化財ネットワークを構築していることが観察された。サーカシヴィリ政権期（2004-2013）にジョージアは反ロシア的姿勢を強め、国立トビリシ博物館の現代史のコーナーに「ソ連占領期のジョージア」と題する常設展を開設し、ソ連期をロシアによる侵略と捉える歴史観を明示化している。観光産業と結びついた資本主義的なネットワークの構築や反ロシアを意図するものであるにもかかわらず、博物館をイデオロギー装置として利用する発想自体は、大量の博物館・美術館、モニュメントによってソ連文化の優越性を示そうとしたやり方を継承している。新たな文化的アイデンティティの模索と歴史の語り直しが同時進行する現場としても、コーサスにおけるソ連文化の位置づけを研究することは、近年、日本を含む国際的な流れとして問題となっている歴史の創作性や修正主義の問題を検証する上でもモデルとして有効である。

ソ連期の演劇・映画は、住民に対する教育啓蒙の重要な文化装置として位置づけられた。テレビやラジオのロシア語放送と並び、正しいロシア語・文学を受容する窓口として各民族共和国にロシア語劇場と映画スタジオが設置された。現地語の作品も手法においてロシア文化との結びつきが強い。ロシアへの研修制度により、スタニスラフスキー・システムへの統一が図られた。同時に、レニングラードで活躍したトフストノーゴフ（ジョージア）はヴァフタンゴフ（アルメニア系）の手法を受け継ぎ、音楽性と心理主義を融合させたソ連型音楽劇を確立した。しかしながら、ジョージアにおいては共和国外で活躍した文化人への関心が薄く、若者たちには名前も知られていない。他方、ペテルブルグのボリショイ・ドラマ劇場における調査によって、明らかになったのは、トフストノーゴフが活動の拠点としたロシアにおいても、ソ連解体後も俳優教育に特化した演劇教育が行われ、演出については、指導者となる個々の現役演出家独自の演劇性に任されるため、歴史的継承が成されていないということである。つまり、ソ連期の演劇システムがスタニスラフスキー・システムですべて解釈される傾向にあり、トフストノーゴフについても心理劇の側面以外の記憶が捨象され、ソ連初期から続く実験演劇の系譜と現在のロシア演劇との断絶が起きている。画一性というソ連文化のステレオタイプと歴史の伝承や記述における過去の書き換えについて批判的検証がさらに求められる。

ソ連期のアンダーグラウンドの文化活動についても、体制への抵抗や純粋芸術性が強調されてきたが、アヴァンギャルドの実験的表現の追求の中に、かえって伝統芸能を創作の源泉として取り入れているケースがあり、作家が意図的に厳冬文化を加工して継承・保全しようとした試みが見られる。ルーシク・アグェツィは民族衣装、日用品などあらゆるものを収集しながら、幼少期の記憶の風景を油絵に、民族的モチーフをもとに衣服を加工し、現在そのコレクションと作品はアルメニアの伝統文化や祝祭儀礼を復元する際の貴重な資料になっている。逆に映画監督のパラジャーノフは、ウクライナやコーカサスの各種伝統儀礼をモチーフを自由に加工して創作したものが、伝統の記録であると受け取られてしまい、新たな「伝統儀礼」として実際の民族文化の中で継承され始めているという現象もある。

【研究の協働性】 国際的な研究協力については、プロジェクト初期にエレヴァン、トビリシで行った 3 つの国際シンポを始め、日本への招聘、若手研究者を含む派遣によってかなり具体的な関係を築くことが出来た。パンデミックやロシア軍のウクライナ侵攻による社会情勢の不安定化によって、中断されてしまったが、本プロジェクトで得たヒントをもとに今後も研究協力を行うことで合意でき、近いうちに研究成果を書籍にまとめることで合意している。（協力機関：ベオグラード大学、アルメニア科学アカデミー・文化人類学、ロシア国立人文大学、ロシア国立モスクワ高等経済学院、トビリシ大学、ヨーロッパ大学オーデン校、パリ第 3 大学、トレチャコフ美術館映像部門）。

特に若手研究者の海外での研究発表を支援したことで、国内の協力体制も強化できたと考えている。

新型コロナウイルス感染拡大という世界的な未曽有の規模での移動の停止およびロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻をうけた世界情勢の劇的な変化を受けて、現地調査および国際交流を軸とした研究計画を根本的に変更し、縮小しなければならなかったのは極めて残念である。パンデミックでの交流停止の時期に幾度か ZOOM での企画を検討したが、ネット環境を含む各地の状況が障害となって、実現できなかった。最終年に招聘や渡航など対面での交流をかろうじて再開し、情報・意見交換できたことで今後の研究への協力について確認できたことは大きい。また、これまでの研究協力を背景に情勢についてざっくばらんに意見交換でき、信頼関係を確認できたことも大きい。本研究プロジェクトは文化への政治介入について客観的に検証することもテーマの一部としているが、その研究姿勢を維持することは現在についてもアクチュアルで

あることが確認できた。

【研究成果の還元】 研究者間だけではなく、成果を広く社会と共有し、興味関心を掘り起こすために、通訳付きの国際シンポジウム・研究集会、レクチャー付きの映画上映会や作品朗読会を実施し、これまで知られていなかったソ連文化を、「ソ連とはロシアと複数文化の混交である」という観点から紹介し、参加者から理解を得られた。先に述べたように、本プロジェクトの延長として今後、国内外の研究協力者と論集の出版について検討を行っている。

【今後の課題】

近年、コーカサス地域についても地域固有の言語文化や歴史研究が進み、一定の成果を得ているが、逆にテーマが国家の枠組みに細分化される傾向にある。アルメニアのジェノサイドへの関心の高まりとともにディアスポラ研究も盛んではあるが、結局は「本国」との結びつきや移住先のコミュニティーごとの調査研究になっている。また、民族の自立性を強調することによって、ロシア語文化を含む複数文化性への配慮が薄くなっている。しかし、ソ連が消失しても、ソ連文化は一定の時代の文化的規範であったこともあり、ある時を境に突然消失することはない。生活習慣の継続、マスメディアやネット上の情報流通の可能性など、民族諸地域の文化形成に形を変えながら現在も多少なりとも影響を与えているし、記憶と歴史の問題としても重要である。ローカルな複数の言語文化圏がひとつの（ロシア語）言語文化圏とオーバーラップする形で共存していたソ連は、グローバル化のモデルケースとしても検証に値する。創作家自身の内在的複数文化性と、彼らの活動によって多様化したロシア文化の諸相を考察することで、諸地域の歴史文化の接触点と有機的なつながりを個別に検証する必要があるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　5件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 楯岡求美	４．巻 106
２．論文標題 劇評「豊かな感性を育てる学校教育の基盤は、文学と演劇」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 シアターχ（カイ）月刊批評通信	６．最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Grecko Varelij	４．巻 109/110
２．論文標題 Несовершенство как прием: стратегии и функции деградации субъекта（手法としての不完全性：主題を格下げする戦略と機能）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Russian Literature	６．最初と最後の頁 165-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 楯岡求美	４．巻 33/34
２．論文標題 歴史パノラマとしてのマヤコフスキー≪ミステリヤ・ブッフ≫	５．発行年 2019年
３．雑誌名 SLAVISTIKA	６．最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Grecko Varelij	４．巻 1
２．論文標題 Лирический субъект в поэзии минимализма（ミニマリズム詩における抒情的私）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Субъект в новейшей русскоязычной поэзии？теория и практика	６．最初と最後の頁 369-381
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Grecko Valerij	4．巻 1
2．論文標題 Помарка Ламарка: теория наследственности между искусством и политикой в СССР 1920-х годов（ラマルクの失策：1920年代ソ連の芸術と政治の遺伝理論）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Утопический упадок: искусство в советскую эпоху	6．最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Grecko Valerij	4．巻 1
2．論文標題 Вербальное и невербальное в поэзии неоавангарда（ネオアヴァンギャルド詩における言語・非言語表現）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Проблемы стиховедения и поэтики	6．最初と最後の頁 185-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Grecko Valerij	4．巻 1
2．論文標題 Corroding the Iron Curtain: Irony and Satire in the USSR	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Globalization and Modern Eurasia: History, Trends, Challenges for Change.	6．最初と最後の頁 80-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 中村唯史	4．巻 2018
2．論文標題 2017年概観ロシア文学	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文芸年鑑	6．最初と最後の頁 81-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　0件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 Grecko Valerij
2．発表標題 「サラマンダーから新しい人間へ：パウル・カメラーの実験とソ連での反響」
3．学会等名 ペテルブルク大学主催国際会議Сотворение нового человека（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Grecko Valerij
2．発表標題 Multilinguality in the Work of Ilya Zdanevich: The Caucasian Text.
3．学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies
4．発表年 2019年

1．発表者名 Tadashi Nakamura
2．発表標題 M. Gorky’s Cosmological Perception of the World in the 1910s: Analysis of His Novel Gubin’s Spatial Structure
3．学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Grecko Valerij
2．発表標題 Многоязычие как поэтический прием и тбилисский авангард
3．学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Kumi TATEOKA
２．発表標題 Georges Pitoeff（Геворг Питоян）and Modernism in Theatre
３．学会等名 The Dynamics of Cultural Processes between Center and Periphery
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kumi TATEOKA
２．発表標題 Acceptance and influence of Soviet movies in postwar Japan
３．学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村唯史
２．発表標題 К вопросу о бурятском балете "Красавица Ангара"（ブリヤートのバレエ『美しいアンガラ』論）
３．学会等名 日本ロシア文学会第69回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Grecko Valerij
２．発表標題 Межкультурная коммуникация в свете теории культурной семиотики Юрия Лотмана（ユーリ・ロットマンの文化記号論と異文化間コミュニケーション）
３．学会等名 Cross-Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kumi TATEOKA
２．発表標題 Образ персонажа из отдаленной по духу культуры в пьесе Евгения Гришковца "Как я съел собаку"(2002)（エヴゲニー・グリシュコヴェツの戯曲「どうして僕は犬を食べることになったか」（2002年）における遠い文化圏の人物像）
３．学会等名 Cross-Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nakamura TADASHI
２．発表標題 О переводе "Журавлей" Расула Гамзатова с аварского на русский язык.（ラスル・ガムザトフの『鶴』のアヴァール語からロシア語への翻訳について）
３．学会等名 Caucasus: Cross-Cultural Crossroad at Russia-Armenia University
４．発表年 2018年

１．発表者名 Junji ITO
２．発表標題 From "Switzerland of tourists" to "Switzerland of revolutionaries": Georgian mountain horse-riders in Russian empire
３．学会等名 Caucasus: Cross-Cultural Crossroad at Russia-Armenia University（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nakamura Tadashi
２．発表標題 Скрытые споры: Эйхенбаум "Мелодика русского лирического стиха" и Якобсон "Лингвистика и поэтика"（隠れた争点：エイヘンバウム「ロシア抒情詩の旋律」とヤコブソン「言語学と詩学」。）
３．学会等名 第二期ロシア研究学会「亡命研究とスラヴ学」（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nakamura Tadashi
２．発表標題 Изображение тела, машин и природы в произведениях Василия Гроссмана（ヴァシリー・グロスマンの作品における身体、機械、自然の描写について）
３．学会等名 The 8th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kumi TATEOKA
２．発表標題 Мистерия-буфф: Маяковского: Исторический процесс и его театральная репрезентация（マヤコフスキー『ミステリー・ブーフ』における歴史的プロセスとその演劇的表現）
３．学会等名 The 8th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Grecko Valerij
２．発表標題 Corroding the iron Curtain : Irony and Satire in the USSR
３．学会等名 The 8th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 沼野充義、望月哲男、池田嘉郎、楯岡求美編著	４．発行年 2019年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 886
３．書名 ロシア文化事典	

1．著者名 К．Ичин（ред.）　Grecko Valerij　etc	4．発行年 2019年
2．出版社 Изд-во Белградского унверситета	5．総ページ数 443
3．書名 Искусство и революция: сто лет спустя（芸術と革命：100年後から振り返って）	

1．著者名 服部倫卓、原田義也、中村唯史他	4．発行年 2018年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 416
3．書名 ウクライナを知るための65章	

1．著者名 ゴーリキー、中村唯史	4．発行年 2019年
2．出版社 光文社	5．総ページ数 288
3．書名 二十六人の男と一人の女　ゴーリキー傑作選	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中村　唯史 (NAKAMURA Tadashi) (20250962)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	Ｇｒｅｃｋｏ　Ｖａｌｅｒｉｊ (Grecko Valerij) (50437456)	東京大学・教養学部・特任准教授 (12601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	伊藤　順二 (ITO Junji) (80381705)	京都大学・人文科学研究所・准教授 (14301)	
研究分担者	佐藤　千登勢 (SATO Chitose) (90298109)	法政大学・国際文化学部・教授 (32675)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	小川　佐和子 (OGAWA Sawako)	北海道大学・文学部・文学研究院 (10101)	
研究協力者	児島　康宏 (KOJIMA Yasuhiro)	東京外国語大学・外国語学部・非常勤講師 (12603)	
研究協力者	五月女　颯 (SOTOME Hayate)	京都大学・文学研究科・日本学術振興会 特別研究員（PD） (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計10件

国際研究集会 The Dynamics of Cultural Processes between Center and Periphery	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Cross-Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Caucasus: Cross-Cultural Crossroad	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 映画上映・シンポジウム「ソ連映画個人アーカイヴの現在」	開催年 2019年～2019年

国際研究集会 シェンゲラーヤ監督「若き作曲家の旅』上映・特別講演会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 「ソ連映画個人アーカイヴの現在：牛山純一コレクション」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 「雪解け期ソヴィエト映画と ジョージア（グルジア）映画スタジオ」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 「詩人ユーリー・デゲンとジョージア・アヴァンギャルド芸術」	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 セルビア・アヴァンギャルドとヨーロッパ	開催年 2022年～2022年
国際研究集会	開催年 null年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ジョージア	トビリシ大学	トビリシ大学西欧諸言語文学研究所	ジョージア文化人類学会	
アルメニア	アルメニア科学アカデミー文化人類学研究所			
セルビア	ベオグラード大学人文学部			
ロシア連邦	ロシア国立人文大学	経済高等学院	ロシア舞台芸術大学	他1機関
アルメニア	アルメニア科学アカデミー文化人類学研究所	ロシア・アルメニア大学人文学部		
ドイツ	ヨーロッパ大学フランクフルト・オーダー校文化学部	イェーナ大学コーカサス研究所		
フランス	パリ第3大学			